

十勝晩成会創立四十周年記念発行

十勝開拓の祖
依田勉三物語



十勝晩成会創立四十周年記念発行

十勝開拓の祖

依田勉三物語

再発行に当たり

「依田勉三物語」は、十勝開拓の祖といわれる依田勉三の考え方や生き様について、次の時代を担う子供たちをはじめ多くの人に知つていただきたく、十勝晩成会創立四十周年を記念して再発行いたしました。この冊子は、昭和四十七年十勝晩成会を創設するに当たり作成し配布されたもので、当時の晩成会創立準備会委員会代表の寺田真一氏（十勝晩成会初代会長）の「発刊に感あり」では、次のように紹介されています。

「…晩成会の創立総会を、十月十五日に開くのに当つて、北海道新聞社に掲載された“光は土といきている”依田勉三編をその嗣子依田八百を編者とし、晩成会を発行所として、この“依田勉三物語”と題した単行本を、子を持つ親とその子等に読んで頂くことを念じ、併せて晩成会発足の引出ものといたしたい主旨であります。…」

日本の未来のために大いなる夢を抱き、十勝野の開拓に情熱を傾け、多くの苦難に立ち向かった依田勉三の晩成社は、一つの企業としてみれば失敗の連続でしたが、多方面にわたる豊富な経験と実験はその後の十勝農業と産業の発展の礎となりました。北海道の多くは官主導の下で屯田兵によつて開拓されましたが、十勝は民間主導でなされ、依田勉三から受け継いだ自由闊達なパイオニア精神と開拓魂は、現在も十勝に脈々と息づいています。

明治十五年七月十五日に依田勉三と鈴木銃太郎が帶広に到着してから約百三十年、異常気象や東日本大震災などの自然災害、原発事故、デフレ不況、国際化の進展など現在多くの問題がありますが、どんな困難にぶつかっても希望を捨てなかつた依田勉三についてこの冊子を通じて知つていただき、新たなフロンティアを目指す一助となれば幸いです。

最後に、再発行に当たりご協力いただきました方々に心よりお礼を申し上げ、ご挨拶いたします。

平成二十三年七月十五日

十勝晩成会会长 山田昭義

目 次

三余先生の教え（一）	二	バッタのあらし（一）	二八
三余先生の教え（二）	四	バッタのあらし（二）	三〇
三余先生の教え（三）	六	重ねる苦心（一）	三二
結びつき（一）	八	重ねる苦心（二）	三四
結びつき（二）	一〇	重ねる苦心（三）	三六
結びつき（三）	一二	重ねる苦心（四）	三八
結びつき（四）	一四	十勝は実る	四〇
新しい土は招く（一）	一六		
新しい土は招く（二）	一八		
新しい土は招く（三）	二〇		
帯広の土（一）	二二	著者 和田 徹三	
帯広の土（二）	二四	挿絵 和田 芳郎	
帯広の土（三）	二六		

【注記】 原作の仮名づかいや用語は、現代の小中学生にも読みやすいように、直しました。

三余先生の教え（一）

Y

「あの冬瓜（かもうり）」に目鼻をかいたのは、だれかね。」

土屋三余先生は静かに一同を見まわしました。その中には依田勉三と兄の佐二平もおりました。互いに顔を見はつていると、先生はまた話しつづけました。

「私はその者を叱るのではない。冬瓜は物を言わないが、われわれと同じように一つ一つ命を与えられている物だ。われわれは自分たちの生きている意味を大事にするように、冬瓜の生きている意味を尊敬しなければならぬ。冬瓜は人に食べられて役に立つ物で、人にいたずらされる物ではない。さあ、いたずらした者は、ここに残りなさい。私は、これか

ら冬瓜にあやまつてくる。」

生徒たちは、こそこそと話しながら、部屋から出て行きました。部屋に一人の子がしょんぼり残りました。部屋から出て行つた生徒たちは、どうなることかと耳をそば立てました。するとまもなく、その生徒が出て来て生徒代表のそばへ行つたかと思うと、気の毒そうに小さな声で言いました。

やがて、羽織袴を身につけて、三余先生は二人を引き連れ、たわしと水桶を持って学校のすぐそばの畑へ出かけて行きました。先生はぶつとふき出したくなるような顔のかかれた冬瓜に、まじめくさつておじぎをしました。

「冬瓜どの。」

と先生は、生徒全部に聞こえるような声で言いました。

「この度はあなたの着物を墨でよごしてしまい、まことに申しわけありませんでした。深くおわびします。」

もう一つおじぎをした先生は、水をつけたたわしで、いたずらを消し始めました。

いたずらをした生徒は、赤い顔をして、こつくりどうなずいて見せました。生徒たちは、これはいよいよおもしろくなつたぞ、と言わんばかりに、きよろきよろして成り行きを見守りました。

た。

三余先生の教え（二）



依田勉三は嘉永六年（西暦一八五三年）静岡県
大沢村で依田善右衛門の三男に生まれました。
家は大きな農家でしたが、お父さんは学問を
大切にする進んだ考え方の持主だったので、兄の
佐二平が十四歳、弟の勉三が七歳のとき、土屋
三余先生の塾（学校）にあづけました。

三余先生は勉三のおじさんに当たる人でした
が、親類だからといって、兄弟をほかの人と別
にあつかうことはしません。先生は優しさときび
しさを二つながら持っていた人だったので、生徒た
ちからしたわれもし、おそれられてもいました。

先生は若いころ、江戸（今の東京）で東条一堂
について学んだすぐれた学者でしたので、大名
の中には、おかげの学者にしたいと言つてく

る者もありましたが、先生は生まれたところを動きませんでした。

「人は生まれた時は、みんな裸なのに、なぜ百姓の家に生まれた者は武士の家に生まれた者に見下されるか。」

きちんとひざに手をおいた先生は、こう言つて、生徒たちを見まわしました。この塾は立派な百姓を作ろうとして始められた学校だつたので、生徒のほとんどが農家の子供たちでした。

「はい」。

と手をあげたのは小さな勉三でした。

「士農工商（江戸時代の身分制度）という区別をお上が作つたためもありますが、百姓も職人も商人も勉強が足りず、立派な人柄にならうとしないからです。」

「よろしい。よく覚えていた。」

先生は、満足そうに、につこりと笑いました。

「おまえの家も私の家も、武士の家柄であった。しかし、これは少しも誇りにはならない。立派な人柄でさえあれば、その人がどんな仕事をしていても、決して人に見下されたりしないものだ。」

せき一つする者もない静かな教室に秋の夕日がかけつてきて、ひとしきり、キリギリスの鳴く声が聞こえました。

「ばかにされてもしかたがない人間、それは、何の仕事も持たず、しようとも思わない怠け者だ。」

生徒たちの真剣な目が、きらりと一様に光りました。

三余先生の教え（三）

三余先生の一一番きらいなことは、なんと言つても、急けることでした。次は、人をばかにすること、物をむだにすることでした。生徒たちに良くうたわせた「莫らん歌」急けてはいけないと教える歌」の始めを、やさしい今の言葉に直してみましょ。

寝床ねどをあげて 顔洗かおあらい

急けず 部屋へやを掃除そそうする

これがぎょううぎの始めです

掃除あとの後は 片づけて

声こゑをそろえて 本ほんを読よめ

また、物をむだにせず、大事だいじにあつかうこと

を先生は教えました。先生は、自分でも粗末な

着物を着て、藁草履をはいていました。

食べる物は、みんな同じで、ごく簡単な物ば

かりでした。みそ汁に入れる実は、たけのこ、わらび、ふきなど山野にできる物が多く、しかも、灰汁ぬきをしませんでした。

新米の生徒が顔をしかめて、変な声を出しました。

した。先生はじろりとその生徒の方をながめ、またそ知らぬ顔でごはんを食べ続けました。生徒たちは、皆先生の方をちらつと見て、その生徒に気をつけろとでも言うように、にらんで見せました。

きかん気な佐二平は、涙を目にためながら、おかわりのお椀を出しました。

先生はまた、人をばかにしてはいけない、ということを教えるために、生徒には必ず「さん」をつけて呼びました。生徒たちもお互いに「さん」をつけて呼び合うように、しつけました。

冬瓜にいたずらをあやまりに行つたのは、物を大事にすることと、お互に尊敬し合う心の美しさを教えようとしたのでしょうか。

佐二平と勉三は、さつきから口の中へ入れたフナをもて余していました。内蔵を取つていないので、まったく変な味がしました。

するとその時です。

「佐二平さん、おかわりしなさい。」

先生にじろりとにらまれた佐二平は、あわててフナを飲み下しました。

「うまいだらう？」

「はい、おいしいです。」

結びつき（一）

「依田君、ぼくらは。
と渡辺勝は鈴木銃太郎と顔を見合わせて言いま
した。

「牧師になりたいと思うが、君はどうだ？」

勉三の机に、英語の本が開いたまま置かれて
いました。窓から見える木々の若葉がぬれたよ
うにきれいです。外をながめていた勉三は、ふ
とわれに返つたように、勝の顔に目を移しまし
た。

「ほくは牧師にはならない。この塾に入つたの
は、故郷の先生のすすめで洋学を勉強するた
めだつた。」

「なんのために洋学をやるんだ？」

と、勝は勉三の顔をのぞき込みました。



「今ぼくは何も考へていない。勉強でいっぱいさ。これからの日本は、外国のことを使うと知らねばならない。ただそれだけが今の目当てだ。」

「しかし、ぼくらがそろつて牧師になれたら、うれしいんだがなあ。」

銃太郎は熱心にすすめました。

勉三、勝、銃太郎はワッデル塾で一番仲の良い友だちでした。勉三は年長で落ち着いた性格だつたので、二人は兄のように勉三をしたいました。

明治三年に十八歳で東京へ出た勉三は、まず英語を習おうとしてこの塾に入りました。この学校はイギリス人ワッデルが開きました。ワッデルはキリスト教の宣教師で、お医者さんでもありました。

勝と銃太郎は、ワッデル先生に習っているうちに、自分たちも先生のような仕事をしたいと思うようになりました。

勝はあけっぴろげで、強情な性格でしたが、また涙もらいどころもありました。そして、自分が槍の使い手で、先祖は鬼退治で有名な渡辺綱だと自慢しました。

銃太郎は、昌平坂学問所の総長をした親長の三男で、父のすすめでこの塾に入りました。また、妹のカネもやはり、外人の建てた横浜の女学校に入りました。銃太郎は、優しく人当たりのやわらかな人でした。

これらの人たちが、やがて十勝の大平原で鍬をふるうようになるとは、そのころ夢にも思わなかつたでしょう。

結びつき（二）



「あらゆる物の中^{ものなか}で、人ほど尊いものはない。
相手^{あいて}がどんな人間^{にんげん}であつても、その人間の中^{なか}の
人を尊敬^{そんけい}しなければならない。だから一人^{ひと}一
て^{ひと}いる時^{とき}も、自分^{じぶん}を粗末^{そまつ}にしてはいけない。」

福沢諭吉先生^{ふくざわ ゆうきち}の力強いお話^{ちからづよ}が続^{はなし}いています。
ここは東京三田^{とうきょうみた}、元の島原藩中屋敷慶應義塾^{しまばらはんかやしきいおうぎじゅく}の
大広間^{おおひろま}です。

水^{みず}を打^うつたような静^{しず}かな塾生^{じゅくせい}の中で、勉三の
目^めが燃^もえていました。福沢先生^{ふくざわせんせい}のおつしやること
とが、三余先生^{みよ}の言われたことと同じだと気づ
いたからでした。また福沢先生^{ふくざわせんせい}は、物^{もの}を大事^{だいじ}に
し、屁理屈^{へりくつ}を言わず、世^よの中^{なか}のためになり、暮^く
らしを豊^{ゆた}かにしてゆく道^{みち}を説^とかれましたが、三
余先生^{みよ}の言われたこともそれに通じていたと、

勉三は思いました。

やがて、福沢先生が講義を終えて部屋から出て行かれると、塾生の間には話し声が起こりました。

勉三は、ふと勝と銃太郎のことと思い出しました。二人はワッデル塾を出ると築地にあつた神学校（今の明治学院大学）にそろつて入学しましたが、勉三は彼らと別れて、福沢先生の塾に入りました。

「北海道は土地が肥えている上に、たくさんの宝物が手もつけられずに眠っている。いわば、宝島である……。政府は早く国民を北海道に移させて、北海道を開かせるとともに、北海道を守らせなければならない。もし外国が攻めて来るならば、北海道は一つの良い城になるだろう……。」

勉三の胸に鍬の入ったことのない地味の豊かな大平原が浮かびました。

「すばらしいなあ。」

思わず勉三はひとり言をもらしました。

慶應義塾に学んでいた勉三が、ホーリース・ケプロンの「報文」を読んだのは明治八年のことでした。これは、そのころの北海道開拓使長官黒田清隆に招かれて、はるばるアメリカから北海道に来たケプロンが、北海道中を調べてまわつたことを報告した文でした。

結びつき（三）

「今年の作物は出来が良いようだが、二百十日（立春から数えて二百十日）九月一日ころが心配だなあ。」

依田佐二平は、扇子でふところへ風を送りながら、かたわらの机で下調べをしていた勉三に、話しかけました。

「はあ。」

と勉三は顔を上げて、窓ごしに緑もえる畠をながめました。

「しかし、この辺の土地は使いすぎた土地だから、出来が良いといつても知れたものですね。」

「はあ。」

「そら、始まるぞ、ケプロンの話が……。」

と言つたのは渡辺勝です。向かい側から、これもやはり下調べの手を休めて首を伸ばしました。

勉三は、明治九年、二十四歳で慶應義塾を卒業すると、故郷に帰りました。そのころ、兄佐二平は賀茂郡長をしていましたが、翌十年に中学校を建て、農村の若者を教育し、三余先生のお考えをつごうと思いました。そこで、勉三は兄を助けて、私立中学（豆陽学校）を蓮台寺村に建てました。

佐二平と勉三は毎日教壇に立ちましたが、二人だけでは人手が足りないので、勉三の親友渡辺勝を呼びよせて、教頭になつてもらいました。勝は神学校を出ると伝道師になつていきましたが、親友からの招きにこたえて、このいなか中学にやつて來たのでした。そして三人は、学校がもつと大きくなつたら鈴木銃太郎にも来てもらおうと話し合いました。

「そら、始まるぞなんて。ぼくがいつも言つてゐるみたいだな。あははっ…。」

と勉三は照れくさそうに言つて、笑いにまぎらわせました。

二人も笑いにつり込まれましたが、勝はいたずらそうに言いました。

「この前に聞いたのは、あれは何日だつたけな。
「もうよせ。そんなにいじわるすると、もう一
ペん聞かせるぞ。」

と勉三は勝をにらむ真似をしました。

「いや、何度聞いてもすばらしい。
と勝はまじめな顔で言いました。

「たしかに。」

佐二平もまじめくさつた顔で言いました。
「見わたす限り鉄を入れない、肥えた土とは、
やはりケプロンの言うとおり、北海道は日本の宝島だ。」

「なんだ、兄さんに伝染してしまった。」

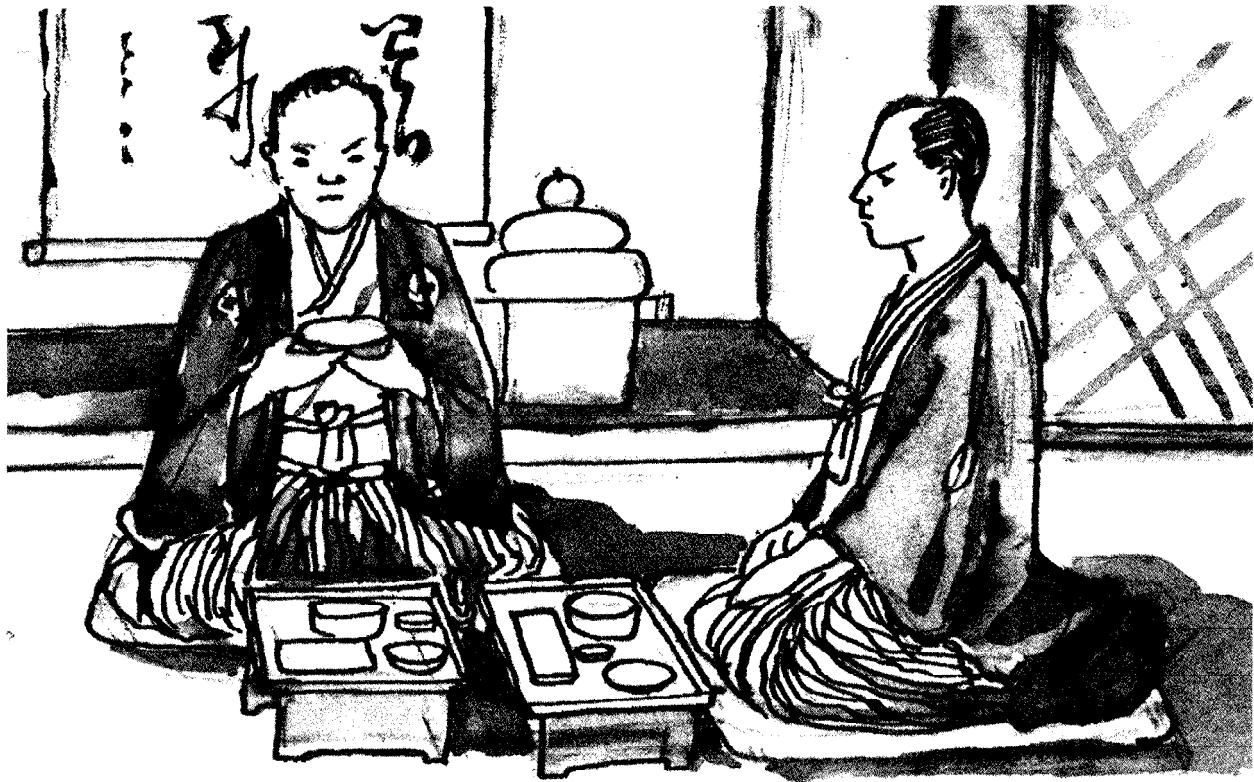
三人は、どつと声をそろえて笑いました。

結びつき（四）

勉三は明治十二年四月、親類の依田善六の妹で土屋準二の妹でもあるリクを嫁にもらいました。勉三は二十七歳、リクは十八歳でした。リクの姉が佐二平の妻だつたので、兄姉弟妹が夫婦だつたのです。

豆陽中学を興したほか、佐二平は、いろいろな仕事をしましたが、佐二平は利益に動かされてするのではなく、人のためになるということに動かされて始めました。たとえば、大沢から池代までの道路は、自分の金をつかつて開いたものです。

また、山ばかりで畠地の少ない伊豆の農家のために、養蚕（蚕から絹糸を生産すること）業を広めました。そのため、妹たちを信州のある



製糸工場にわざわざ入れて、糸の紡ぎ方を習わせました。

また、豆海汽船会社を興し、その地方の産物を東京方面に送る仕事も始めました。しかし、これらの仕事は全部失敗に終りました。

十二月三十一日、除夜の鐘に送られて、明治十三年もすぎようとしていました。佐二平は帳簿をパタンと閉じて、目をつぶりました。ゴーンとお寺の鐘が胸にしみ透るように聞こえました。

「今年も、やつぱりだめだった。」

ひとり言をもらした佐二平の胸に、ふと勉三のよく言う大平原が浮かびました。

「そうだ。」

佐二平は、はたとひざを打ちました。

明けて明治十四年元日、松飾りに、しめ縄を

はつた家に、いつもと違った引きしまるような空気がみなぎっていました。床の間に先祖から伝わった掛軸を下げ、兄弟はおとそを酌み交わしました。

「勉三さん、君はよく北海道へ行きたいと言つていたが、一つやつてみるか。」

佐二平は、いつものいかめしさにない笑顔でこう言うと、勉三の杯になみなみとお酒をつきました。

「本当ですか、兄さん。」

勉三も笑顔で念をおしました。

「本当だ。広いところで、思い切りやつてみよう。今年は、君に北海道の実地について調べてもらう年にしよう。」



Y

新しい土は招く（二）

「函館はそんなに外国ふうの町ですかね。ふー

む。」

鈴木親長は、いかにも感心したようにうなりながら、腕を組みました。しばらく雨が続いていたせいか、部屋の中が湿っぽく、暗くて時々雨だれが針のように窓に光りました。ここは、横浜弁天通りにある親長の家です。

「そうです。昔読んだアメリカの本に出ていた町の絵に良く似ていました。」

「ふーむ。それからどうしました？」

親長は、話の続きをせわしく催促しました。

「蕨野へ行き、開進社の畠を見ました。これ

は和歌山の岩橋鉄輔という人の興した開拓会社です。私が行つたころはちょうどソバの花

盛りでした。

勉三は話し続けました。

森・ユーラップ・オシャマンベを経て伊達藩士を調べ、函館へ戻つてから船に乗つてネムロにわたり、ベツカイ・アツケン・クシロを経て十

ものだ。」

勝の大津までの苦心の旅を、ある時は沼にうずまり、ある時はけがをし、何度も野宿を重ねて、やつと札幌に着いた時は、もう秋の半ばになつていました。

ひざの上でこぶしをにぎりしめながら、親長は元気に言い切りました。勉三と銃太郎が二回目の北海道の調査のため横浜を発つたのは、明治十五年六月一日の朝でした。

「札幌の豊平を通つた時、小さな水田に稻穂が美しく実つていました。まるで、故郷へでも戻つたような気持ちがしましてね。山鼻の屯田兵村では蚕室を見ました。また、パンの工場やビールの工場も見ました。町はごばんの目のようになつていて、函館とは違う外国

ふうの町でした。」

「それはご苦労でした。依田さん、われわれも

いつしょにやるぞ。肥えた土地を相手にする

のならだれにでもできるが、開かれていない

土地を開いてこそ、國のお役にも立つという

新しい土は招く（二）

「すばらしいところだ。」

「ここに決めよう。」



勉三と銃太郎が喜びにほおをほてらせて、赤い太陽が沈もうとするオベリベリ（帯広）原野に立つたのは、七月半ばのことでした。見わたす限り、広々とした野原、北東に十勝川、南東に札内川、北に帶広川が流れ、土も良く肥えているようでした。

勉三は、札幌県令（県知事）に帶広村の荒地百萬坪（一坪は畠二枚分の広さ）を下げわたしてくれるようにお願ひして、すぐに移つて来る準備のため故郷へ戻りました。銃太郎は、酋長モチャルクの小屋を買い入れて住まい、みんなの来るのを待つことになりました。

伊豆に戻つた勉三は、渡辺勝などと共に北海道へいつしょにわたる農家をさがしまわりました。が、なかなか相手になつてくれませんでした。

「北海道なんて、ハイカラ（目新しくしゃれてること）なこと言うが、それあエゾのことじやろが。熊がうようよして、ションベンするのにカナヅチがいるつちゅう。くわばら、くわばら、おれあ、まだ死にたくねえからな。」

と、ひどいけんまくでどなりつける者もありましたが、やつとのことで十戸あまりまとめることができました。

渡辺勝は豆陽中学をやめ、鈴木親長の娘力ネ（銃太郎の妹）と結婚しました。しかし、親長と力ネは後で行くことにし、勉三、勝始め一行

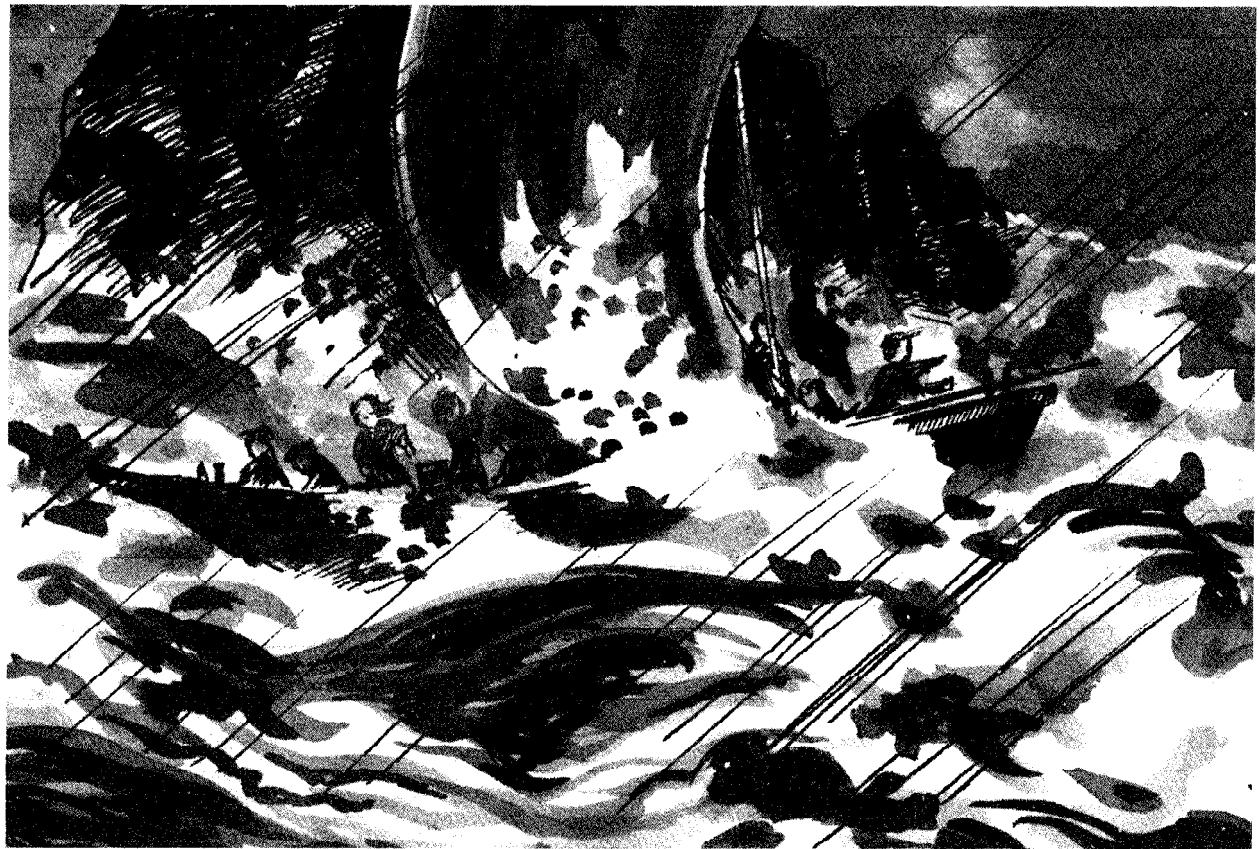
は明治十六年四月十日、高砂丸に乗つて横浜を出発しました。

函館から一行は陸を行く者と海を行く者に分かれました。

海を行く者は勝ほか十名、帆かけ船日光丸に乗り込み、米、みそ、こうり（竹や柳で編んだ服を入れるケース）など、荷物全部を積み込んで、十八日の朝函館を発ちました。

船は思うように進まず、難義を重ね、やつとホロイズミの沖にさしかかりました。にわかに上陸したいと言い出す者がおり、船を岸へよせようとしました。すると、急に強い西風に変わり、船を岸にぶつけそうになりました。あわてて錨を投げ込みましたが、めりめりと今にも切れそうな綱の音、エリモ岬の岩角が目の前に立ちはだかりました。

新しい土は招く（三）



「みなさん、慌てるでないぞー。」

と一人の船乗りがさけびました。

「このままでは船が岩に当たつて死ぬばかりだ。沖に出てもどうなるかわからないが、万一助かるということもあるぞ。」

「よし、まかせた。」

とさけんだ者があり、みんなそれに賛成しました。

船がするする帆を上げて、錨綱を切ると、あつという間にうなりながら走り出しました。そして、たちまち岬をまわることができました。が、風はいよいよ強く、ゆれる船の中へ波は音立てながら流れ込みました。

みんなは、ただ座つたままでした。

隊長の渡

辺勝も、今はこれまでと覺悟を決めて、大切な物をたるにつめ込み、いつでも流してやる準備をしました。しばらくは、死んだ者のように船に身をまかせていた人々は、はつと目を見はりました。

「わあ、助かつたぞ。」

いつの間にか、船は山のかげにかくれて、風がやわらいでいました。そこはサルルの港でした。勝は、歩いて行きたいという者を四人引き連れ、ヒロオからベルフネ川へ出て、大津へ着いたのは二十七日の午後でしたが、シケのため二十八日の朝、やつと上陸することができました。函館から陸を進んだ人たちも、四月というのに吹雪や氷雨にあつたり、こうりをしょつて岩のがけをよじ登つたり、それはそれは苦心の末、やつと札内川にさしかかったのは五月九日

のことでした。

「みなさん、ここが帶広です。ここがわれわれの骨をうずめるところですぞ。」

ながら、とほうもなく広い原野を指しました。

あたりは大昔にでも戻つたようにしーんと静まり返つて、鳥の鳴き声さえ聞こえませんでした。人々はそれぞれだまつて何か考え込んでいるようでした。

「おーい。」

その時、向こう岸から手をふりながら、よつて来る人たち、それは船で先に着いていた一行でした。むかえに来てくれたのです。

「おーい。」

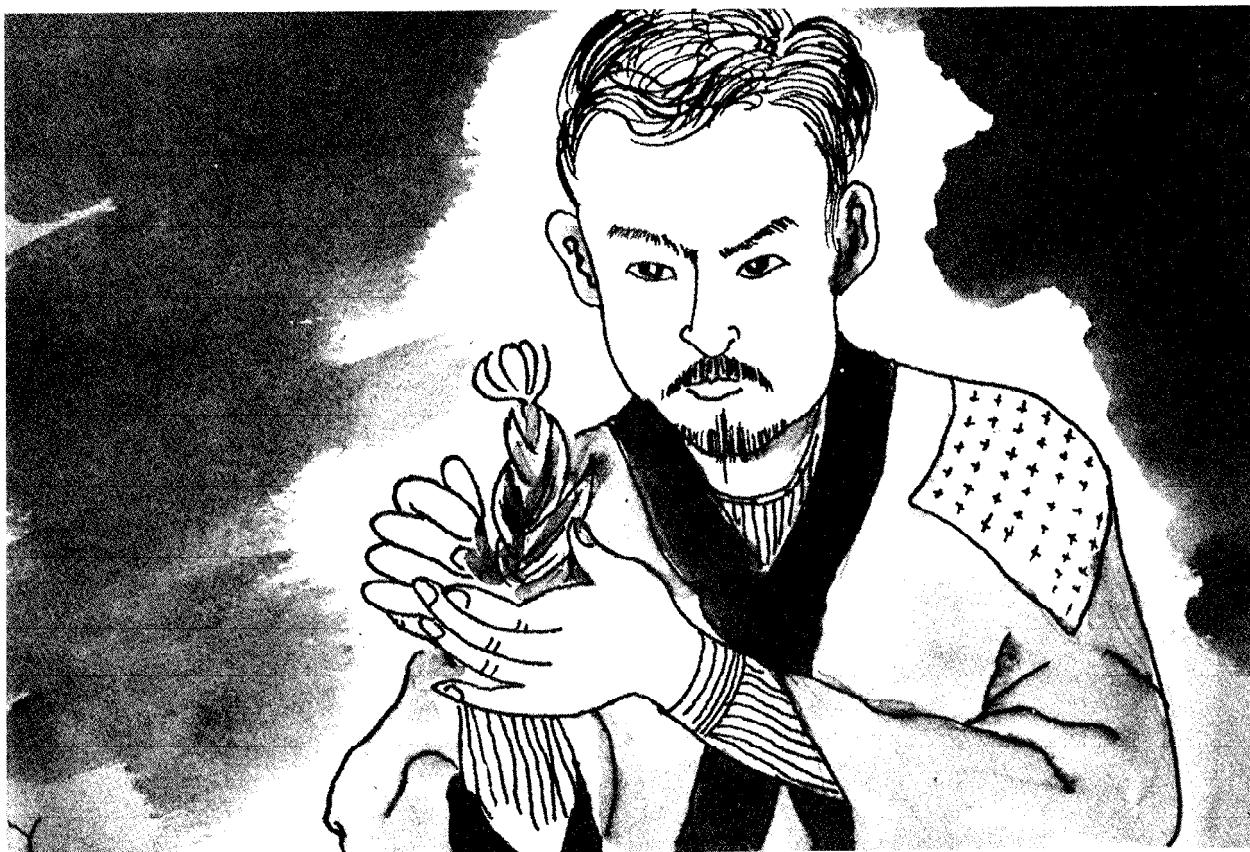
こちらの人たちも、急に元気な声をはり上げました。

帯広の土（二）

勉三たちの集まりは晩成社と名づけられました。大器晩成という言葉がありますが、大人物は長い年月の間にだんだん出来上がつていくという意味です。勉三たちも、あせらずに少しづつ大きくなつていきたいという考え方から、この名前を選んだのでしょうか。

さて、帯広に着いた晩成社の人たちは、まず、住む小屋を作りました。小屋といつても丸木を縄で組み合わせた、まことに粗末なものです。床は、柳の枝、その上にほし草をしきました。こんな小屋に二年間も暮らさねばなりませんでした。

彼らは木を切り倒し、ササやトクサを刈り、焼きはらつてから、耕しました。そのため、



一人一日の仕事は、お話にならぬほどわざかなものでした。

ある日、勉三はいつものように鍬を持つて畠に出ました。ふと足元を見ると、萬作（ふくじゆそう）が美しい花を開いていました。

荒野の中を見る黄色の花は、目も覚めるばかりあざやかでした。萬作は人里離れた山の中で、こつそりと咲く春のさきがけです。勉三はこの花が大好きでした。

「おー、萬作だ。これはすばらしい。」

勉三はしばらく、鍬にもたれて萬作に見とれました。

「萬作や、ふーむ、どこから鍬をおろそうか。」

これはよい句だぞ。萬作や、どこから鍬をおろそうか。」

勉三はこうつぶやきながら、はでなことのき

らいな、この花のすがたをうつとりとながめました。

勉三の句には「朝顔や、つるべとられてもらはりありませんか。」

そのころ、野火がほうぼうで起きました。これは和人の獵師が草原の中から鹿の角を拾うために、アイヌを使って火をつけさせるからだと言われていました。

五月二十四日の夜のことでした。勉三たちの小屋のまわりが大火灾になり、どんどん燃え広がっていきました。すると、付近のアイヌたちは、色めき立つてさわぎました。

「今度来たシャモ（和人）は、おれたちを焼き殺そうとして火をつけやがった。やつらを一人残らずやつつけろ。」

帶広の土（二）

アイヌたちは大変怒つて、晩成社をおそおう
としましたが、銃太郎と親しくしていた酋長モ
チヤルクは、これを止めました。

「おまえたちは、彼らが火をつけたところをじ
っさい見たのか？」

「・・・・」

「そうだろう。証拠も無いのに人をうたがうの
は良くないぞ。ともかく、わしが彼らに会つ
て良く話し合つてみる。」

モチヤルクは、さつそく勉三たちのところへ
来て、この話をしました。

「どんでもない間違まちがいです。またということも
ありますから、みなさんにわれわれの気持ち
が良くわかつてもらえるように、お話をさせて



くださいませんか。」

と勉三は熱心にモチャルクにたのみました。

モチャルクは、自分の家にアイヌたちを呼び、勉三、勝、銃太郎の三人に来てもらつて、話し合いをさせました。勉三たちの気持ちがだんだんわかるにつれて、アイヌたちの顔が明るくなつてきました。

聞いていたアイヌたちの目に涙が光りました。今まで和人にずい分だまされてきたアイヌには、和人が信用できなくなつていました。そんな和人の中にこういう親切な人たちがいるかと思うと、つい胸がいっぱいになつたのでしょうか。

「うたがつたりしてすまない、すまない。商人

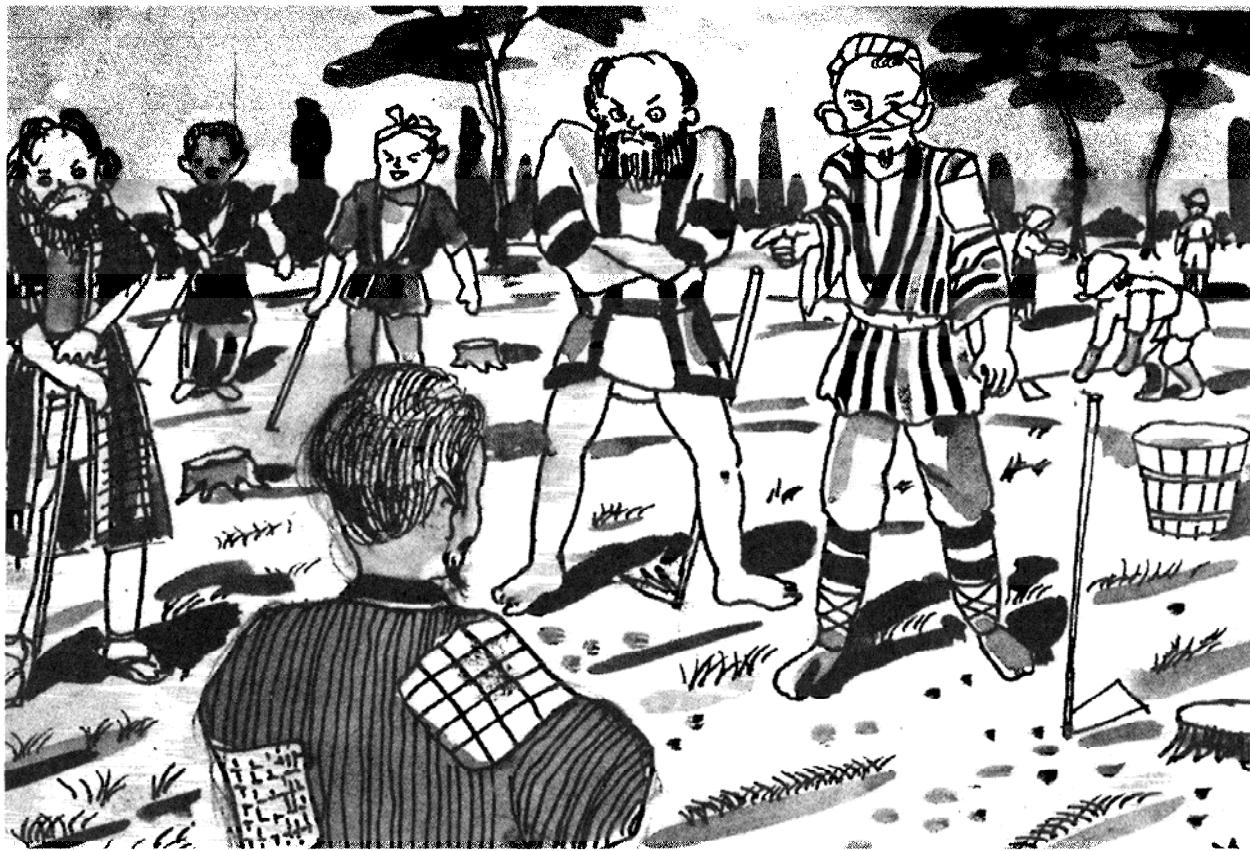
どシヤモズるいけど、畠シヤモ親切。」

アイヌたちは、口々に言いながら喜び合いました。

そのころ、内地から来た猟師や漁夫があまりに荒らしまわつたので、サケや鹿が急に少なくなりました。政府があわてて取りしりをきびつけてください。耕し方からとり入れまで全部教えてあげましょう。また、種のほしい方に分けたあげましょう。」

「みなさん。」
と勉三はアイヌたちに呼びかけました。
「今度十勝川でサケをとるなどいうおふれが出て、さぞお困りだと思います。みなさんは、今まで畠で精を出したことはないが、もし本気でやつてみようと思うなら、遠慮なく言つてください。耕し方からとり入れまで全部教えてあげましょう。また、種のほしい方に分けたあげましょう。」

帯広の土（三）



勉三たちが最初にまいたのは、大麦おおむぎ、小麦こむぎ、とうもろこしなどでした。米は故郷こきょうから二年分持つて来ていましたが、できるだけ食べのばすために野の草やヤマベ、ウグイ、アカハラといつた川魚などをたくさん食べました。

その年は雨あめが少なく、作物の芽さくもつの出めが良くありませんでした。

「依田さんは雨のせいにしているだが、おらは土つちが悪いせいだと思うだ。」

広い畠ひだりの中で、背の高い目の光つた男が、小太りのずんぐりした男に話しました。

「そうかも知れねえ。だからよ、おらたちがひとり立ちできるまで、月給げつきゅうをもらいたいもんだな。」

「そりや、良いことに気づいただ。さつそくみんなに相談するか。」

その男たちにそそのかされて、勉三たちに文句を言つてくる者、まあまあ我慢しようとなだめる者、種をまいたばかりなのに、もうこんな騒ぎになつてしましました。

また、そのあたりは、力やブヨが多く、彼らを苦しめました。かゆくて仕事ができないばかりか、かき傷がうんできずれてくるという始末で、困りきつた人たちは、ブヨよけの面を作つてかぶりました。赤ん坊をおんぶして畠に出る女は、赤ん坊にも面をかぶせました。赤ん坊は苦しがつて泣きどうでした。夏の暑い盛りに体の肌を出せないのは、まことに苦しいことでした。

勉三、勝、銃太郎は、ともすれば元気の消え

てしまいそうな人たちを、なぐさめ、はげました。八月四日から力を合わせて道路を開くこと、毎月お互いの畠を見まわり、その後で話し合いをすること、その時に帳簿の検査をすること。

こんなことをお互いの話し合いで決めておきながら、逃げ腰の人がありました。勉三は、中でも目立つた三人の男を呼んで聞いてみました。やせた顔に、きかなそうな目を光らせた男が口を切りました。

「こんな土地は、どろ沼と同じでね。いればいるほど深みにはまり込んでいくだ。」

勉三はいろいろと言つて聞かせましたが、その晩のうちに三人は逃げ出してしまいました。

バツタのあらし（二）

よいしょ、こらしよとかけ声も勇ましく、石じを運ぶ者、つるはしをふるう者、みんな汗だくで働いています。

今日は八月四日、良く晴れた日です。前の話し合いで決まつた道路造りの仕事に、一同は夢中になつていました。

その時、ウォーンというおそろしいうなり声や、雷のようにも聞こえる音を人々は耳にして、ハツと仕事の手を休めました。すると、ウレガレップの方から、まつ黒な雲がもくもくとわき出たか、と見る間にどんどん広がつてきました。ついには、太陽をかくし、あたりは急に日暮れのように暗くなつてしましました。うなり声はいよいよ高くなり、体の力はいきなりぬ



き取られたかのように、人々は身動きもできず、ただおろおろと空を見上げるばかりでした。

すると、空一面に広がつた雲が下にどつとくだれ落ちてきました。

「バツタだ！」

気違きちがいじみたさけびをふき飛とばして、ザザザ

ザーツと滝たきのようすさまじい音を立てたバツタは、人であれ木であれ畠であれ、何もかもうめつくし、バツタの上にまたバツタが折り重なるほど降ふつてきました。

少し足を動かしても数十匹うごきが踏みつぶされるぐらいでした。

人々がただおどろきのあまり何か口走くちばしつている間に、バツタは地上の緑ちじょうみどりの色を全部せんぶく食いつくしてしまいました。

これほどさまじいバツタの襲来しゆうらいは、世界の歴史上珍れきしじょうめずらしいことでした。

やがて人々の中に、ふと気がついて、石油の空きかんを鳴ならしたりする者もおりましたが、そんなことでじゅうたんのようにしかれたバツタの群れを追い払はらうことなど、できるわけがありませんでした。

しばらくして、われに返かえった人々は急いで畠へ行つてみました。苦心くしんに苦心かきを重ねて育ててきた作物さくもつは、ほんのわずかな時間じかんで、すっかり食い荒あらされておりました。あづきとうり類るいがどうにか助かつたくらいで、小屋の窓まどや屋根から家の中へ入り込まれ、着物きものまでかじられた者もおりました。人々は途方とほうに暮れて、ただ、顔を見合わせるばかりでした。

バッタのあらし（二）

バッタはその後、数回にわたって襲つてきました。そうでなくてさえ不満でしかたなかつた人々は、やけ半分に飛び出して行きそうになりました。勉三たちは、だれかに抜けられると總崩れになるので、その中で一番危なそうな男を二人連れて来ました。

「今が大事な時です。もしあなただ勝手なことをすると、みんなの気持ちがくじけてしまいます。」

勉三は、一言一言、祈りを込めるようにして言いました。

「こつちにしたつて、大事の時です。いつたい人をだましておきながら勝手なことをするなんて、そりあ無理むりというもんだ。」



「わしは、だましはしない。」

勉三は少しむつとして言いました。

「だましたじやねえかね。いいところへ連れて行くと言つたのは、だれだかね。」

「見たまえ、ここはいいところだ。山といい川といいなかなか良いながめだ。木も魚も豊富ほうふではないかね。」

「そんなものはどこにだつてあるだ。」

「広い土地があるではないか。」

「バッタに食われた広い土地があるだ。」

「しかし、バッタだって、いつまでもいはしない。バッタの出てくる土地を見つけて、全滅ぜんめつさせることもできるじやないか。」

「とにかく、こんな淋しいさみところは、もうまつぱらご免めんですだ。」

「都會は初はじめから都會ではない。この淋しいとこ

ろを都會にするのが、われわれではないかね。」

「あんた方は、そんなほらを吹いて人をだますがた。」

「だましやせん。」

勉三は、またむつとしたようでした。

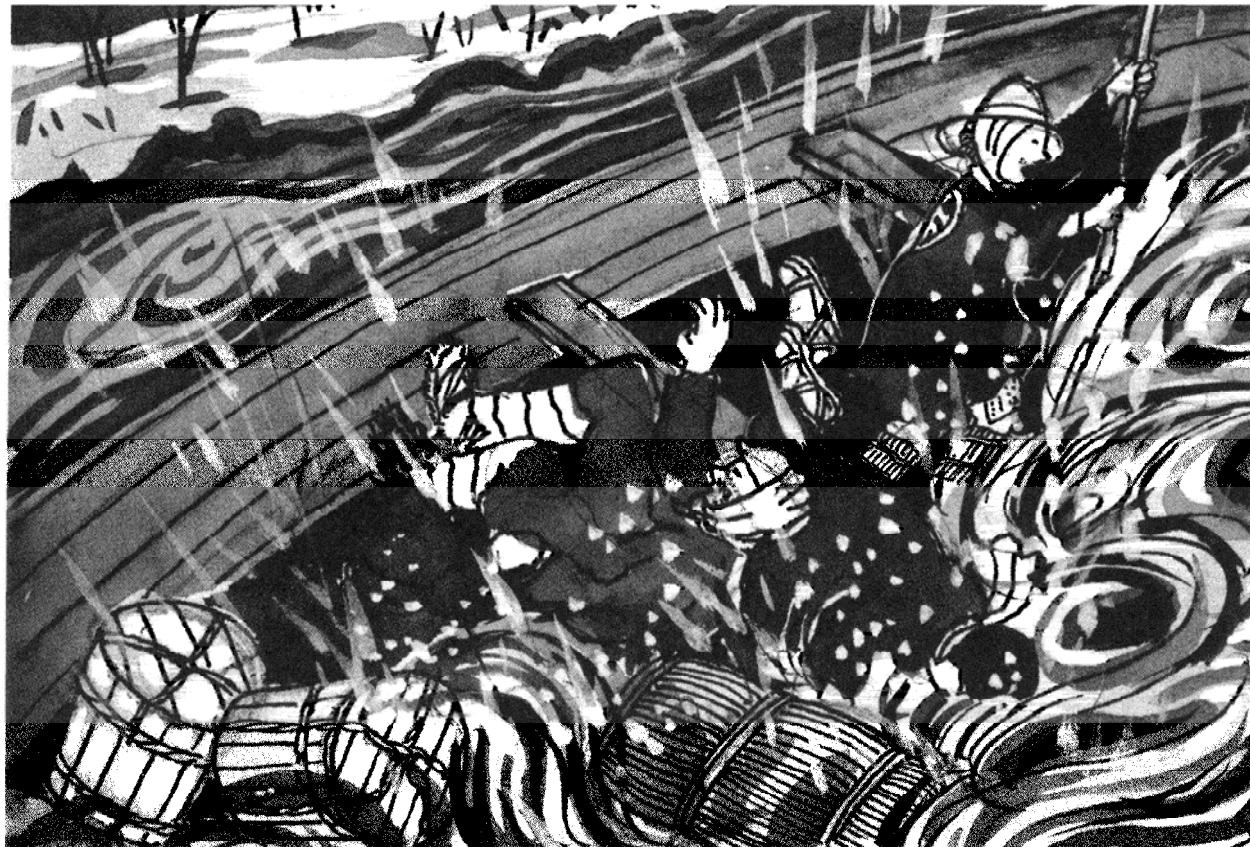
「私たちは、自分の利益りきえきのためにやつているのではない。この荒地あらちを立派りつぱな畑にすること

は、日本の畠を増やすことではないか。」

勝と銃太郎が中へ入り、どうにか二人の男をなだめることができました。

このバッタ騒動そうどうのために、道路を開く仕事も、互いの仕事を見まわつて話し合いをすることも、できなくなりました。

そして、バッタが来なくなり、やつと安心するかしないうちに、ひどい熱病ねつびょうがはやりだしました。



重ねる苦心（二）

その年の九月十日に初霜が降りました。バツタの食べ残したうりやなすの葉が枯れ、だいすやあずきも傷みました。それから間もなく二度目の霜が来ましたが、だいこん、にんじん、ばれいしょなどはわりに良くなれました。とり入れのすんだ人たちは、川でサケをとりました。

十月に入つて、銃太郎のお父さんの親長が、娘のカネと勉三の弟文三郎を連れて村に来ました。人々は大変喜んで、三人をむかえました。

カネは渡辺勝の奥さんになり、学校を始めました。学校と言つても、晩成社の子供が二人、アイヌの子供が一人でした。親長は勉三、勝、銃太郎の三人をはげまし、良い相談相手になりました。

こうして明治十六年もどうやら暮れ、明治十七年をむかえました。今度は、前の年に味わつた苦しみがかなり役に立ちました。

また、政府は技師をよこして、バッタの出るところをつきとめさせ、食べ物がなくて困つているアイヌをやどつて、バッタ退治をしてくれました。しかし、この年は雨が多く、作物の出来がやはり良くありませんでした。

明治十八年の春で、故郷から持つて来た米やみそがすっかり無くなりました。勝と銃太郎は、雪どけを待たずに大津へ出ねばなりませんでした。

二人は大津で故郷から送つてきたお金を受け取り、米やみそをたくさん買い込みました。そして、ヤムワツカから船乗り二人をやとい、十勝川に船を出しました。

「ひどい水だなあ。」

銃太郎は、すさまじい音を立てながら流れにごつた雪どけの水をながめながら、ひとり言のように言いました。

「上りだから、おまえたちも大変だな。まあ、しつかりたのも。」

と、勝はいたわるような目で二人の船乗りの方をながめました。

船は思うように進まず、船乗りは汗だくでサオをにぎり始めました。

船が二里（一里はおよそ四キロメートル）ほどさか上り、イカシベツに近づいた時です。無理のかかつていたサオがいきなり二つに折れ、あつという間に船がひっくり返つてしましました。

四人の男も、みんなが首を伸ばして待つている米やみそも、見る見るにごつた川に飲まれてしました。

重ねる苦心（二）

川に投げ出された男たちは、やつとのことで岸にはい上ることができましたが、大事な米やみそやお金まで無くしてしまいました。

勝と銃太郎は、自分たちが助かつたことも忘れて、うらめしそうに川づらをにらみつけ、うなだれながら村へ戻つて来ました。村に残つている食べ物はわずかな野菜だけです。人々は困つているアイヌと同じように、野の草を食べて、飢えをしのぐよほかなくなりました。

そのころ晩成社では、一戸に馬一頭と、ゆくゆくハムを作ろうという考え方から豚を飼うことにしていったので、人の食べ物が豚の食べ物となり変わらなくなりました。

勉三の妻リクは、新しい雑炊を工夫しました。



た。わずかな米、きざんだいこんのほし葉と

サケの肉を煮込み、塩で味をつけたおかゆでした。

「渡辺さん、お口に合わないでしようが、どうぞ。」

リクは、ちょうど相談そうだんことがあって、勉三の家に来ていた勝に、雑炊をよそつたおわんを差さし出しました。

「いや、これはどうも…。」

と勝は、箸はしを取りました。二口、三口食べると、

勉三とリクにかわるがわる笑顔えがおを見せて勝が言いました。

と言つて、勉三はちよつと目をつぶり、考え込むようにして続けました。

「開墾かいこんのはじめは豚とひとつ鍋。」

これほどゆるがない心を持つた勉三にも、時

には、しおれてしまうことがありました。三年も不作が続くので、ひよつとすると土地の選びと勉三は箸はしをおろしました。

「わしと家内かないが食べた後は、豚ぶたが食べるんだ

よ。」

「なるほど…。『落ちぶれた極度きよくどか豚とひとつ鍋』か。どうだ、この句は？」

「いや、わしは落ちぶれたとは思わないね。」

開拓かいたくという仕事が簡単にできれば、北海道がどんなに広くても、一年もあればたちまち開けてしまう。こんな苦勞くろうをするのは当たり前のことだ。そうだ、こうするといい。」

と言つて、勉三はちよつと目をつぶり、考え込

むようにして続けました。

「開墾かいこんのはじめは豚とひとつ鍋。」

これほどゆるがない心を持つた勉三にも、時には、しおれてしまうことがありました。三年も不作が続くので、ひよつとすると土地の選び方が悪かつたのではないか、と思つたからです。

重ねる苦心（三）

晩成社の決まりでは、開拓を始めてから二年目から、地代として出来た作物の十分の二を本社におさめることになつていきました。けれども、とり入れが済んでみると、とてもおさめられるほどではありませんでした。

「困つたなあ。」

勉三は、長いため息について、うでを組みました。眉を八の字によせた勉三の心の中で、二つのことが戦っていました。村の社員が困つているのに、無理に地代は取れない。地代を取らなければ、故郷の社員から、ただお金だけを取つてはいることになる。考えたあげく、勉三は、故郷の人たちに我慢してもらうことに心を決めました。



「このままでは、故郷の人にも村の人にも申しわけない。わしは自分の金で、村が良くなるために、いろいろなことを試してみよう。」

勉三は、こう決心すると、次々に新しい仕事を始めました。まず、トウベリ村で牧場をやり、牛や豚などを飼うほか、水田や製麻などもやつてみました。でん粉も作りました。ハムはあまり多くは出来ませんでしたが、その肉の良いのに横浜のホテルのコックがおどろいたほどでした。

ところが、帯広でどんなに良い物が出来ても、大津まで簡単に出せる物でなければ、運賃がかさんで高い物になります。それでは、ちつとも売れません。勉三が帯広へ来た時から考えていたのは、一日も早く良い道路を造るということでした。そのころ、大津へ出るのに五日か

ら七日もかかるという有り様でした。何度も道府にお願いしましたが、ダメでした。そこで勉三は、自分のお金で帶広川に橋をかけました。

明治二十一年四月のことでした。ある夜、野火が牧場に燃え移りました。勉三はやとい人といつしょに夢中で消しまわり、やつと家畜小屋を火から守れましたが、柵は燃え、牛や馬の食べる小ザサや草が焼け、見わたす限り黒こげの野原です。林の燃え落ちる音、すさまじい響きがあたりをおおい、家畜は小屋で声も出せず震えていました。

広い焼野原に杭のようにつつ立つた勉三は、いつまでも動きませんでした。

重ねる苦心（四）

明治二十三年の春近く、牧場の牛が次々にたおれ、四月の終わりまでに二十頭ほど死んでしまいました。食べさせたものが良くなかったからです。また、熊に食われて死んだものもかなりありました。

そのころは、試しにやつた水田などがうまくいかず、家畜かちくを飼かうのが主な仕事で、畑にはばれいしょ、キヤベツ、どうもろこし、だいず、あづき、あわなどをまきました。

すべてが思うように進まない上に、五月の初め、やとい人の不始末ふしまつから火事を出しました。身のまわりの道具どぐ具ぐを出せたぐらいで、勉三の家も豚舎とんしゃもやとい人の家から倉庫まで焼やけてしまいました。倉庫の中の米、麦、農具のうぐまできれい



に燃え、豚四頭が丸焼けになりました。

勉三は打ち続つづく不幸に、ともすればくじけそ

うになる自分を力づけるために、良く読んだ本

があります。それは二宮尊徳先生の「報徳記」

でした。尊徳先生は百姓の神様のような人で

す。先生の一言一言は、土の中から聞こえる声

のように、どつしりとして、こうごうしく思わ

れるのでした。のちに尊徳の孫、尊親が同じ十

勝に移つて来てからは、時々たずねて夜おそく

まで語り合い、感じたことを晩成社の人々に伝

えてみちびいていきました。

明治二十四年、長い間の願いがやつとかなえ

られて、帯広と大津の間に道路が出来ました。

この工事が石狩まで続けられました。

「これから十勝は、どんどん開けるぞ。これか

らが、わしの本当の仕事だ。」

と、勉三は、今までの苦労もわすれて喜びました。

明治二十四年に四戸しかなかつた帶広は、勉三の思つたとおり、二十五年に四十四戸、二十六年には百二十戸に増えました。

そのころ、勉三の牧場には、小作人のほか、やとい人が十五人もおり、牛百七十四頭、馬百二十九頭を数えるほどになつていました。

勉三、佐二平兄弟の今までの苦心に対して緑綬褒章りょくじゅほうしょうが授けられたのは、明治二十五年十一月十一日でした。

十勝は実る

「ごらんください。この見事な稻穂の波を。」

故郷から監督かんとくに呼ばれた桶口鶴吉は、みのを着て無言のままあぜ道に立つている勉三に話しかけました。

明治四十二年九月、五十町歩ちようぶ（一町歩ちようぶ二一ヘクタール）一万平方メートル）の水田に、たわわに実った稻穂が、秋晴れの心良い風に大海原おおうなばらの波のように果てしなくゆれていきました。

「今までの苦労くろうが夢ゆめのようだ。」

鶴吉にこたえるともなくつぶやいた勉三の目に、うつすらと涙が光りました。

勉三が途別とべつで水田を始めたのは、明治三十三年のことでした。ひどい湿地しつちでしたが、苦労の末、やつと二町歩ほどの水田を作りました。



はじめの年は、反三俵（せんさんびょう）（千平方メートル当たり

百八十キログラム）のとり入れがありましたが、次の年もまたその次の年も、さっぱり実りませんでした。いく度となく止めようと思いましたが、気を取り直して、三年目もやつてみることにしました。

今度は「においわせ」という種を使つてやつてみたところ、反五俵（せんごひょう）（千平方メートル当たり三百キログラム）のとり入れができ、人々は小おどりして喜びました。ある時は鳥に荒らされ、ある時は洪水にあい、苦心を重ねて、今まで歩き続けてきました。

「鶴吉さん、これからが本当の仕事だ。田んぼは、この三倍（さんばい）にしよう。ぜひ力をかけてください。」

勉三は、ふしきれだつた大きな手で、鶴吉の

手をにぎりしめました。

勉三は、このほか乳牛（にゅうぎゅう）を飼い、バターや練乳（れんにゅう）を作る仕事を始めました。牛肉（ぎゅうにく）やマト煮（に）（せいろ）、チカ、エビなどのかんづめの製造（せいぞう）や、蚕（かいこ）を飼つたり、しいたけを作つたりする仕事もやりました。

また、明治二十八年には、たくさんのお金を寄付（きふ）して、帶広（じやう）に小学校（こないがっこう）を建てました。十勝神社（じゅうかつじんじゃ）を建て、帶広神社（さんどうじんじゃ）の参道（さんどう）には樹（き）を植（う）えました。

大正十四年十二月十二日、窓（まど）にしのびゆる雪（ゆき）の精が勉三のたましいをやさしく運び去りました。今、帶広神社の前にみのをまとつた勉三の銅像（どうぞう）が、ますます開けていく十勝平野（へいや）を見わたすようなすがたで立っています。

おわり

平成二十一年七月一日 印刷
平成二十三年七月十五日 発行

十勝開拓の祖

依田勉三物語

著者 和田 徹三
挿絵 和田 芳郎

発行所
十勝晩成会

帯広市西三条南七丁目十四番地
電話 ○一五五一二四一二二二三三

印刷所
ソーゴー印刷株式会社

